

民はどろ水で顔を洗うとか、あの集団疎開よりもっと厳しい現実に直面している人たちが、いまだに世界のあちこちにいるという事実を、私たちは忘れてはならない。

教科書攻撃によって、「平和」を教えることがあやうくなりかけているこのごろは、戦争前のようすにているといわれているが、戦争への道を、二度とたどるようなことがあってはならない。戦中・戦後の体験で、私たちは心底から戦争をにくみ、ぜったいに許してはならないと思っ

ている。
世界にはほりとする平和憲法の精神をつらぬき、真の平和を愛し求める国民であるよう、一人ひとりが正しいはんだん力を身につけ、手を結び合おうではありませんか。

(名古屋市天白区在住)

写真の父は年をとらない

今 井 公 彦

おじいちゃんより年とったお父さんがいる——こう聞いたたら、君たちは「そんなばかなことはあるものか。」と思うだろう。



ところが、ある日、私の長男が気づいたのだ。その変な事実……。

私の母は岡崎に住んでいる。そして、母の部屋の仏だんに、戦死した私の父の写真が祭られている。



「これは、あなたたちのおじいちゃんですよ。ちゃんと手を合わせなさい。」

小さい時からこう教えられて、子どもたちは大きくなってきた。戦闘帽をかぶり、めがねをかけたその顔の年齢ははつきりわからず、「おじいちゃんだよ」と言われれば、おじいちゃんだと思ふことができるていどだった。

しかし、昭和十九年に三十四才で戦死した私の父の写真は、いつまでたっても変わらない。そして、ついに私は写真の父を追い越してしまい、子どもたちから「おじいちゃんより年をとったお父さん」といわれるようになってしまったのだ。

私は今四十四才。写真の父より十才も年上となった私にとって、戦争体験とは、勇ましく戦うことでも争うことでもなかった。むしろそこから逃げのびることであつた。

私の幼稚園時代、空襲警報のサイレンが鳴ると何をおいても机の下に身をかくした。それが日

課であった。今の君たちも防災訓練で同じようなことをしているが、心構えではとてもくらべものにはなるまい。ひとつまちがえば爆弾ばくだんの破片はへんや、吹き飛んでくる建物の一部に当たって死んでしまう。死なないまでも大けがをする。

終戦の年が、小学校入学の年であった。一月ごろに岐阜県の坂下町に疎開そかいした。どんな字を書いたのかは知らないが、字あじがにぎりぎりりという所だったのを子ども心にも心にもおもしろいなと思ったことを覚えてる。ここで、楽しいことを二つと、いやなことを一つ体験した。

最近では、町ではもちろん農村へ行ってもほとんど牛や馬を見かけないが、その牛と馬に追いかけられたのだ。ある朝、にぎりぎりりから坂下へ登校する途中、集団で歩いていたのに、私だけが牛に追いかけられた。ただすれ違っただけで、からかったわけでもないし、あの当時のことだから赤い服など着ていたはずもない。よほどその牛と気が合わなかったのだろう。

馬に追いかけられた時は、ひよつとして馬をからかっていたのかもしれない。

馬小屋の出入口というのは、横木が一本、水平にさし渡してあるだけなのを私は知らなかった。何かの拍子に横木がはずれて落ち、私は一生けん命たんぼのあぜ道を走って逃げた。あぜ道を横にそれてやつと助かった。でも、今考えてみると、牛も馬もそんなに真けんんに追いかけていたとは思われない。なんといいっても一年生の足だ。牛も馬も、町から来た子からかかってやれと考えていたのかもしれない。

また、今では稲かりから脱穀だつこくまで全部機械でやってしまい、わらまで細かくきざんでしまうの

で、長いわらを見たことのない子がたくさんいるようだが、わらでなわとぞうりを作ったことがあった。まず、わらを打ってぺしゃんこにする。それで細いなわをなう。その細いなわを足の指にかけて、その間にわらを通してながら次々に編あんでいく。口で言うほど簡単にはできないが、見よう見まねで作ったものだ。時にはまんまるなぞうりを作って笑われたこともあった。

こうした楽しい出来事のほかに、いやな思い出もある。それは坂下町のいじめっ子たちのことだ。田舎から出てくる子だからいじめるのではない。同じにぎりから出てくる子の中でも、都会から疎開してきているよそもんだからいじめるのだ。集団でとりかこんでいやがらせをしたり遠くの方からものをぶついたりするのだ。小さい私はいやでいやでたまらなかつた。時には回り道をして帰ったこともあった。

八月十五日に戦争は終わった。小学校一年生の私は二学期には親せきをたよって、同じ岐阜県の高富町という所へ移り、高富小学校へ転入した。そこは大変雪の深い所で、私は少し体が弱かったせいもあって、背負われて学校へ通ったおぼえがある。この高富町はまつたけのよく取れる所で、名古屋へ帰った後もちよくちよく訪ねて行って、まつたけごはんや土びんむしをごちそうになった思い出深い土地である。

二年生になって、私はやっと名古屋へ帰ることができた。疎開する前の私たちは、中区東陽町十丁目(今の新栄
二十丁目)に住んでいた。今も昔も近くにビール会社のえんとつが見える所である。その東陽町のあたりは一面の焼け野原になっていた。そこで、遠い親せきをたよって、鶴舞公園つるまの西

側に住むことになった。そこから小針小学校へ通った。その小学校は今もうないが、近くに小針市場というのが残っていて、今もあのあたりを通るとなつかしきを感じる。

この小針小学校時代に、青空教室を経験した。戦争で校舎が焼けて少ないところへあちこちの疎開先そかいさきから帰ってくる子ども達の数が多くなったから、校舎が足りなくなったのだ。さいわい近

くに鶴舞公園があったので、音楽室や普選壇ふせんだん（普通選挙を記念して作られた野外広場）で半日授業を受けることもでき

た。先生はさぞ大変だったろうが、私たち子どもにとってはけっこう楽しい思い出になっている。当時、鶴舞公園にも、現在の図書館のあたりに動物園があつて、そこへよく遊びに行ったものだ。

二年生の三学期、いよいよ中区へ転居した。でも、まだ東陽町には家が建っておらず、少し離れた所に間借りをして暮らした。学校は東田小学校であった。この学校が次の年の四月から名古屋市立新栄小学校となり、やっと落ち着いて勉強できるようになった。

四、五年生のころ、おじといっしょに東陽町の焼け跡の整理に行った。借りてきたりヤカーに何回も何回も、焼け跡の土を乗せて捨てて行った。何か月かかかって新しい家を完成させることができた時、やっと一区切りついたような気がした。

私は戦争で父を失った。父の死後、本当に長い間、私と母、姉、二人の弟、そして祖母の六人は言葉では表せない苦勞をしてきた。戦争による犠牲者ぎせいしやは、戦死したその人だけにとどまらない。死者の陰かげに、その何倍もの犠牲者がいることを忘れてはならないと思う。

君たちはテレビや映画で戦争場面を見ることがあるだろう。それがフィクション（作り話）である

時は、殺された人間（すなわち俳優）も別の物語で大活躍だいかつやくすることができると。しかし、報道番組の戦争場面で、撃ち殺された人間を見たら、その人は決して家族のもとに帰ることはないのだと知っておいてほしい。

今もなお、地球上のどこかで戦争行為いがくり返されている。たとえ核戦争かくのような大がかりなものでもなくとも、安易あんいな気持ちでこれを見すごしてはならない。

一日も早く全世界に平和な日がおとずれよう、みんなで力を合わせようではないか。

（瀬戸市原山台在住）